

# 生死を超えた眼差し

## 文人の 武蔵野

金子光晴（1895～1975年）の詩の特徴は、今ここに生きている人間とは異なる地点から地球環境を見つめているところにあります。生命体の生死を超えた眼差しとでもいうのでしょうか。

### 金子光晴 ③

ひげ、白髪の大渦を巻いてわたる。「これは「武蔵野（習作）」の冒頭の1連です。「白萱」は未枯れ、「穂すゝき」は老化し、光はやつれて陽光も頼りない。叢中から生まれた風が吹き靡くと、老人のような大きな渦を巻きつけてわたっていくよ、と詠んでいます。が、現実にはそのような情景があるわけではありません。

武蔵野を特徴づける記号としての萱原や芒原、齢を重ねた光と風の老いた様子を伝えて、人間はもちろん自然も



金子が専らした吉祥寺の駅前の風景。1966年撮影。写真提供・らかんスタジオ鈴木青男

風景も老いていく。すべてのものには時があり、当たり前のように続いてきたと思っているものもいつかは朽ち果てるのだ、という世界観です。

2連目で草深いところを「旅人」が押し分け急ぎ、「流民のむれ」が草に消え入る後ろ姿が目に入ります。3連目で武蔵野の名物「逃げ水」が登場し、血に染まったイメーシが付与され、「饜飶」が「がはがは」と音を鳴らします。最終連では「池袋の戦ひのあと」「高井戸の杜」といった固有地名が記され、「百羽の鴉」で幕を閉じます。

この詩は、未刊詩集として後に公開された「大腐爛頌」に収録されました。「大腐爛頌」のテーマは、「すべて、腐爛らないものはない！」でした。人間が築いてきた尊い価値観も同様です。「思想も、自由も、モラルも、愛も、すべて、老いざるものはなく、

また、腐爛し、朽ちてはゆかないものはない。」とも記されています。

武蔵野も例外ではないということになるでしょうか。金子は「武蔵野（習作）」で、老いるとは思われていないものの、腐爛するはずなどないと認識されているものをあえて挙げて老いたときの光景を想像しています。そこに金子の転倒した武蔵野愛をみることも可能ではないでしょうか。



過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

\*

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）